

---

# アリスな世界！

遊元 もえ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アリスな世界！

### 【Nコード】

N1090A

### 【作者名】

遊元 もえ

### 【あらすじ】

男子高校生、佐久間アリスは怒っていた。その容姿ゆえにこともあろうに男から求愛されることへも、文化祭で女装させられることへも。そんな学校生活を送る中で、ある日異空間へと迷い込む。おかしい連中から求愛を受けつつ、もとの世界へもどそうと必死に奮闘する。無事アリスはもとの世界に戻ることができるのか・・・。

## 第1話（前書き）

ボーイズラブとなっております。苦手な方はご遠慮ください。

## 第1話

「ごめんなさい。あなたのこと・・・男として見れないわ・・・」  
そう言つと、朝日がまぶしく映える中、その少女はきびすを返して歩き出した。

通算15回目。

その場には、フラレ男がただ一人・・・。  
何がそんなに悪いのか。

嗚呼。今日も虚しいヤローの巣窟。

「私立桜林男子高等学校1年D組、佐久間アリス君。そんなにたくさんラブレターもらつといて虚しい言わない」

机の中に入っていた5通のラブレター！。

ラブ・レター・・・

「男からラブレターもらつてもむなしいわ！！！」

力まかせにその少年は5通のラブレターをグチャグチャに丸める。

「俺は！女の子が好きなんだよ！！」

隣に座る悪友・瀬戸裕馬の首を絞めつつ、絶叫。

「・・・ゲホ、殺す気かつ！キサマ！何が女の子が好きだ。無理だつーの。テメエのその顔、鏡で見てみやがれ。どんな女も隣にいたくねーっつの」

そう。

朝一番で女にフラレ、そして、先ほどから妙にハイなこの兄ちゃん。佐久間アリス。この途方もなく乙女チックな命名を男の子にしたのは「不思議の国のアリス」の大ファンなアリスのお母様。そして、名は体を表すと言わんばかりのこの少年。

街中を歩けば、必ず男が振り返るその端正なお顔立ち。けっして

ロリ系な顔とかではないのだが、黙っていれば美人系である（黙っていれば、の話）。それを引き立てるような色素の薄いサラサラヘア（顔を隠そうと髪を長めにしているのが、よけい色気となっていることに、本人は気づいていない）。体格は華奢ではないが、筋肉質でもない。

「お前も、どの女も隣にいたくないような顔にしてやるーか？」  
でも、性格はとっても男気。

「そりゃ勘弁」

本気で、首をしめかねないことなどから、口を開けばただのやんちゃサンなことがわかる。

ちなみに、さっきからアリスとコントをやっている悪友も、街を歩けば人が振り返る。こっちは女だが。特に、かつこいい！というわけではないが、短髪が陸上部で鍛えたその体格によく合っている、183cmのデカブツ。ちなみにアリスは174cm。低いわけではないが、裕馬の隣にすることが、彼にとっての不幸とも言えるだろう。

そんな二人は今日も仲良し。

あまりの仲良しさかげんに、担任の先生も思わず、

「佐久間・・・瀬戸・・・」

その声を震わせて・・・

「もうとつくにHRは始まっとなじゃ！静かにできんのなら、廊下に立つとけ～～！！」

こんなに立腹。

しかし、月曜日の朝から隣の女子高の女の子にフラれ、1時限目から廊下に立たされる薄幸なこの少年。もちろん、薄幸っぷりはこれだけにとどまらなかったのだ。

『女装喫茶』アリスの園』

HRが終わり、ようやく教室に入り（めんどくさかったので、廊

下でサボっていたともいう)、最初にアリスの目に入ってきたのは・

黒板にでかでかと書かれた、その言葉。

「な・・・何・・・?」

そして、啞然とするアリスに、やんややんやと群れるクラスメイト達。

「よう！主役！衣装はまかせとけ！！すっげー可愛いやつ作ってるからな！」

そう肩を叩くのは、家庭科クラブのヤツ・・・

「メイクは俺が担当だ！」

そう声をかけるのは、スタイリスト志望のヤツ・・・

「ま、うちは綺麗どころの佐久間がいるからな！あとの奴はテキトーに気持ち悪くなつてウケ狙つていこうぜ！」

委員長の一言に、イエー！！と盛り上がるクラスの男共。

「や、ちよつと？委員長？？話が見えないんですけどね？」

嫌な予感満載の中、アリスはできるだけ穏便に、心を落ち着かせて、委員長に問うた。

そして、そんなアリスの心境を知つてか知らずか、委員長は饒舌に語る。

「あ？お前らが廊下で立つてる間に、今年の文化祭のクラスの出し物が決まっただよ。最初は、『不思議の国のアリス』を演ろうかって話になったんだけど、誰も話をきちんと知らなくてさ。本読んだりするの、めんどくさいだろ？だから、いつそのこと女装喫茶にしておもうって話になったんだよ。そうしたら、アリスの衣装着とけばごまかせるだろ？俺って天才　じゃ、楽しみにしてるぜ！佐久間！」

ポンつと、委員長はその少年の肩を叩く。

いい仕事したぜ！的な委員長の説明にブツツと何かの切れる音。

「何で『不思議の国のアリス』が絶対条件で俺が主役で女装なんだ！！！！さげんなデメ〜〜！！」

それまでの穏便な笑顔から一変。

アリスは委員長の胸倉を掴み、前後に思いつきり首を絞め始めた。

「ぎゃ〜〜！佐久間がキレた〜〜！！」

「やめろ！！佐久間！！委員長が白目むいてる！！！」

普段からその愛らしさとは別の暴君っぷりも熟知しているクラスメート達は、連携プレーで委員長奪還に乗り出した。しかし、男気多きアリス君は、その場で暴れまくりましたとき、ちゃんちゃん。

一方、裕馬はというと、

「あゝあ。先が思いやられんなあ。」

その騒動をよそに、役割名簿の女装店員の欄にあつた自分の名前を消し、大道具に勝手に名前を書き込むのでした。そして、大道具から、女装店員に委員長の名前をこっそり移すのでした。

さらりとおいしい所をもっていくチャッカリさんでしたときさ。

「毎日毎日毎日毎日・・・」

ぽかぽかのいい天気。今日は屋上で優雅にランチ（とはいっても、ランチの内容は売店で買ったパンであるが）。

「いいかげんにしろ〜〜！！！」

そんな晴天のもとで絶叫。今日も今日とてご立腹なアリス君でした。

「うるさいな、しかたないだろ。ただでさえアリスは目立ってんのに、そのアリスの女装が見れるとなったら、そりゃ皆わきたつさ」

一緒に学生ランチをしていた裕馬は最もなことを言いつつ、視線は今日発売の単行本。

「だからってなあ！知らない奴らからも、楽しみにしてるぜ、とか言われてもキモイだけなんだよ！！」

屋上のフェンスを足蹴りにしてへこませながら、アリスは声を荒げる。

「おい、学校壊すなよ。まあ、男子高は潤いがないからね」

相変わらず、単行本から目を離さずパツクのコーヒー牛乳をすすりながら、裕馬は応える。

アリス乱闘事件より1週間。どこで聞きおよんだのか（むしろ知らないことのほうが奇跡とも言える）、アリスは廊下ですれ違う人から何らかのコメントを頂いていた。ただでさえ、自分の容姿にコンプレックスを持つアリスは、日々怒りの拳を繰り出しそうになったり、ちょこつと繰り出してみたりしながら毎日を過ごしていた。そして、人だけには飽き足らず、こうして公共物にまで損害を与えているのだった。

そんな。

文化祭も1週間後に迫ったある日。

学校中がにわかに活気づき、どのクラスでも準備が着々と進んでいた。アリス達のクラスも例外なく、あーだこーだと毎日大道具やら小道具、衣装や会場係りの人間達が遅くまで準備にいそしんでいた。そんな中、

「佐久間！今日衣装合わせするから、放課後残つとけよ」

アリスは文化祭が近づくにつれ、鬼気迫る様相になってきていた。そのため、今までは準備にほとんど参加しなくても誰も何も言わなかった。まさしく、触らぬ神に祟りなし。である。

しかし、文化祭も間近のこの時期。

衣装合わせだけはしておかなければならない。

勇気ある委員長は

アリスの返答を聞く前にアリスの怒りを恐れて逃げた……。

「俺は狂犬かつての……」

そう言うアリスだが、

手はきっちり、拳を作っているのだった……。

委員長を見送り、アリスは一人思いふける。

いいかげん、腹はくくつてる。



だって、皆でする出し物に・・・

いつまでも嫌だって、ただこねれないし。

「ま！似合うって決まったわけじゃないし！他の奴のほうが似合ってる奴がいるかもしれないしな！！」

アリスはそう、自分に言い聞かせながら放課後の衣装合わせに臨むのであった。

「・・・・・・・・」

金髪のゆるくウェーブのかかった髪に、青いカチューシャ。大きな丸襟の白いブラウスに、青いワンピース。ワンピースはウエストの部分が絞ってあり、膝が少し顔を出すその裾は下から白いフリルがのぞく。そして、白いハイソックスに、黒のローファー。

まさしく、鏡に映るその姿は、不思議の国のアリスである。

「・・・・・・・・違和感がない・・・・・・・・」

アリスのクラスは今日は衣装合わせのため家庭科室を借りて作業をしていた。そして、ブータれながら家庭科室に足を運んだアリスは、衣装係りからアリスの衣装一式を渡された。そしてそのまま、家庭科室の一角にある準備室で着替えることとなったのだが。

アリスは、着替え終わるとその場にあった鏡に映る自分の姿を見て、やりきれなさを感じた。

その姿はもう、いいようもなく、パーフェクトだったのである。

しかも、これからこの恥ずかしくも似合いすぎてる姿をクラスの人間にお披露目。さらに、文化祭当日には、一般大衆にさらけ出す・・・。

「・・・・・・・・ぶっこわすかな・・・・・・・・」

“何を”とはあえて言わないが、そんなちよつと怖い考えが浮かぶのも、まあ、大目に見るってことで。

アリスは、その場で数回深呼吸をすると、腹をくくって準備室を出た。

しかも。

「これでどーだ！？文句ねえ美しさだろ！！」  
仁王立ちしての、半ば自暴自棄状態。

準備室の外では、衣装係りが待機しており衣装の合い具合を最終確認することになっていた。そして同時に、メイク担当も来ていて、どんなメイクが合うかも検討する予定だった。そのため、アリスが着替えのために準備室に入った時は、外の家庭科室には作業している人間、他の衣装合わせをする人間も含め10人前後がいた。それが、

アリスが着替えて出てくるまで約5分。

家庭科室には、誰もいなかった。

「・・・あ？」

さっきまでは、がやがやとしていたその部屋は、うって変わってシンとしていた。

「何で誰もいないんだ？」

アリスはあつけにとられ、部屋の中を歩き回る。

「佐田く？飯田く？おーい。着替えたぞー。野口く？」

クラスメートの名前を呼ぶが、返事がない。

「何だよ。皆して連れションかあ？」

言いながら、アリスはその情景に何か違和感を覚えた。

辺りを見回す。途中で放棄されているミシン。雑に置かれた衣装の数々。投げ出された、糸と針。

どこかへ行くにしては、作業工程が中途半端である。

「おいおい、何だっというんだよ・・・」

アリスは薄ら寒さを覚えた。

「おーい！佐田！飯田！！どこだよ！」

アリスは家庭科室を出て、廊下でも呼んでみるが返事がない。

おかしい

何が？

すべてが

すべて？

すべて？何が？どこが？いつもと違う？違う？何が？

「何で・・・こんなに静かなんだ・・・？」

今は放課後だが、文化祭前なのでかなりの人間がまだ残っているはずだった。ここは家庭科室だが、下の階には2年生の教室もある。それに、外で部活をしている人間も少なからずいるはずだった。

いつもは気にしていなくても、自然と耳に入ってくる音、声。

廊下を走る音。誰かとしやべる声。テンション高く歌いだす奴、

何かを作る音、罵声、奇声、歓声等、等・・・。

それらが今、何も聞こえなかった。

「は・・・？どうということだよ！」

アリスは、窓から階下のグラウンドを見渡すが誰もいない。

何で・・・何で誰もいないんだ！？声も、音もしないって・・・

どうということだよ・・・！！

アリスは、わけのわからない不安に襲われ、走り出した。

階段を降りて、2年生の教室の扉を開ける。しかし、そこも無人であった。家庭科室と同様、作業を放棄した状態で人だけがいない。なっていた。

次の教室を開けても、次の教室を開けても、誰一人として見当たらない。

「気味ワリイ・・・どうなってんだよ・・・」

アリスは、2年生のすべての教室を回ったが、やはり、誰もいなかった。

アリスは、とりあえずもう一度家庭科室へ行ってみようと階段を昇った。

「・・・は？・・・なんだよ・・・これ・・・」

西階段を昇って右に曲がる。そこには家庭科室があった。

“さっきまでは”

家庭科室があるはずのあおの一角にあったのは、家庭科室などではなく、別棟にあるはずの職員室だった。

「も・・・意味わかんね・・・」

アリスは職員室前の廊下で固まったまま動くことができなくなっていた。

ここはどこ？職員室？何で？家庭科室へ続く階段を昇ってきたはず？何が？どうなって？

アリスの頭の中はパニックで。

何を考えていいのか。むしろ、頭が考えることを拒否している。思考停止。

「あれ？人が残ってる」

その時、いきなり後ろから声をかけられる。

「！」

アリスは驚いて後ろを振り向く。するとそこには、白いカッターシャツに黒のスラックスをはいた男が立っていた。歳はアリスより二、三歳上だろうか。身長はアリスより少し高いくらいで、黒髪に中性的な感じだが、飄々とした表情をしている。

アリスは何よりもまず、人がいたことにホッとした。

「あ、あの・・・」

そして人を見つけると、今度は自分が慌てふためいていたことが

恥ずかしくなり、アリスは何か言ってこの場を取り繕おうとした。

「君、名前は？」

そこに。唐突に、その男は聞いた。

「ア・・・アリス！佐久間アリス！！」

それに、何故か反射的に答えるアリス。

その名前を聞き、男は少し考えてから、口を開いた。

「アリスか。ふーん。可愛い名前だね。男につける名前じゃないけど」

クスクス笑いながら、男は話す。アリスは、人の気にしていることを・・・と、赤くなりながら、名前を出したことを少し後悔していた。

「しかし、可愛い格好だね。ホント、不思議の国のアリスみたいじゃん」

にやにやとアリスの全身をなめまわすように見ながら、その男は言う。

そう言われて、アリスは自分の格好を思い出した。  
いうまでもなく。

赤面。

「こ・・・これは！文化祭の衣装合わせでっ・・・！」

真っ赤になりながら、アリスはしどろもどろで衣装の説明をする。

その様子は、

いつもはズボンばかりの女の子が、初めて男の子のためにオシヤレをしてスカートをはいた時、それを指摘された時そのものであった。

「クク・・・、いいよ。最高じゃん。アリスね。いいシチュエーションかも」

「は？」

一人、腹を抱えながら笑うその失礼な男に、アリスは。

一人で納得してんなよ。だいたいアンタは誰なんだよ。と、その胸中でつぶやく。

その男は、そんなアリスの思いを悟ったのか、

「あ、ごめんごめん。俺はリアンね。」

目尻には笑いをこらえすぎて涙が・・・。

そんなふうにより紹介をすると、ようやく笑うのをやめ、アリスに向き直る（表情は相変わらず飄々としているが）。

「あのさー、信じられないと思うけど、とにかく話を真面目に聞いてくれるかな？俺さ、こっちの人間じゃないんだよねー」

再び、笑顔で爆弾発言。

暗転。

（続く）

## 第1話（後書き）

初めてなので、いたらない部分もあったと思いますがどうだったでしょう。続きもがんばって書きたいと思いますのでどうぞヨロシクです！

## 第2話（前書き）

おかしいことに巻き込まれた予感・・・これからアリスはどうなるのか・・・。  
<br>ボーイズラブとなっていますので苦手な方は  
ご遠慮ください。



## 第2話

ああ、この人、頭ヤバイんだ・・・。

アリスは再び思考停止した頭の中でそう、本能的に感じた。

あれかな。今若者に多い、ドラッグとか？

はは、イツちゃってるて？ふふ。徐々に思考回復・・・でもないか・・・。

「いつとくけど、俺はいたって正常だからね」

そんなアリスの考えを感じ取ったのか、そのリアンという青年はきっちり釘をさしてきた。そして、釘だけさすとさっさと話を進めだした。

「えっとね、まずここはいつもアリスがいる世界とは少し違うんだよね。でも、まったく違うわけでもない。」

アリスはその頭上に？を飛ばす。ちよつとまだ、頭が起きてないんだよね。

それに気付いてか気付かずか、リアンはそのまま話を続ける。

「シンクロ」っていうのかな。普段、俺の住む世界とアリス達の住む世界は接点を持つことなく、何の接触もなく時を過ごしているんだ。まったく別の次元の世界だからね。だけど、今のこの状態っていうのはお互いの世界が微妙に被さって接触している状態なんだ。で、本題はここから。この“シンクロ”状態を作り出してるのは俺達の世界の親玉なんだけど。その理由が暇つぶしってやつ？それで、もちろん、“シンクロ”を解くことはその親玉にしかできない。でも、どうも親玉はこの状況を快適に思ってるみたいだね。今のところ“シンクロ”を解く気はないみたいなんだよね。」

にこにこと微笑みながら、リアンは現実離れた話を繰り広げる。  
「シンクロ」状態が続くと、アリスももとの世界に戻れずにこの  
“シンクロ”した世界にいつけることになるわけ。」

アリスの頭は、リアンの話についていけず、パンク寸前である。  
俺の世界？

アリス達が住む世界？  
シンクロ？

親玉？

アリスは呆然とその場で立ち尽くす。

何が真実で

何が嘘？

「わけ・・・わかんね・・・」

アリスはぼつりと、そうつぶやいた。

そのアリスを横目に、リアンは笑みを浮かべながらアリスの手を  
とる。

「簡単なことだよ。アリス。お前がこの“シンクロ”を解けばいい  
んだから」

アリスの手の甲にキスを落とし、リアンはそう言った。

「シンクロを・・・解く？」

アリスは不安げな瞳でリアンをみつめながらこたえる。リアンは  
顔を上げ、アリスと向き合う。

「そう。親玉に話をつければいいのさ。倒す、とかね」

そのリアンの言葉がアリスの本能を揺さぶる。

真実はどれで、嘘はどれ？

どうしたらいい？

どうすれば・・・いい？

「アリスだけなんだよ。それができるのは」

「俺だけ？」

「だって、この“シンクロ”した世界に来てるのはアリスだけなんだから」

「え？じゃあ・・・他の奴は？」

「そうだ。この学校から消えてしまった生徒はどこへ行ったのか。」

「さあ？でも“ここ”にいないってことは・・・」

リアンはアリスを見据え、こたえた。

「空間のはざまをさまよってるんじゃない？」

気が付くと、世界は変わっていた。

他の世界と“シンクロ”してしまった世界では、建物はいつもと違う造りをしていて、何より人がいなくなってしまった。

君はただ一人、世界を救うことができる勇者なんだ。

世界をこんなことにした悪の親玉を倒して世界を元に戻せ！

そして、友達を救うんだ！

「なぐんで、簡単に言つとそんな感じ？うわゝ何かのゲームみたいじゃん」

今まで真剣に（？）話していたその男は、

そう言いながらケラケラと笑い出した。

俺は・・・

一発殴ろうかと思いました・・・。

「いやいや、ごめん。でも、話したことは本当。だからさ、親玉を見つけて早くどうにかしてよ。俺も元の世界に帰りたいからさ」  
身の危険を感じてか、謝ってはみたものの、まったく緊張感のないリアン。

そんなリアンに対し。

「リアン・・・さん？がどうにかできないの？その、親玉に話つけ

る、とか」

アリスは、しごく真つ当な質問をした。

「えゝ！だってめんどくさいじゃゝん」

そして、ある意味。

予想通りの回答が返ってきた。

あはははゝという全開の笑顔つきで。

もう・・・殴る気力もねえよ・・・。

アリスは、深いため息とともに天井をあおいだ。

「とりあえず・・・あんたの言うこと信じてその親玉を探すしかないってことだよな」

アリスはリアンを正面から見据え、そうつぶやいた。

リアンの言っていることが本当かどうかはかなり怪しいが。今、この学校がおかしいのは本当である。もう、何かに縋るしかアリスにはないのである。

「俺は勇者でここは夢！」

そう思っただけやるしかない。

アリスは腹をくくる。

「夢ってアンタ」

結局納得しているのかしていないのか。そんなアリスの様子を見ながら、リアンは苦笑する。

「まあ、めんどくさいけど俺も少しは手伝っからさ」

ポン、とアリスの肩に手をおき、リアンは言った。

「本当!？」

リアンの言葉に、アリスは身を乗り出す。

そんな、わらにもすがりたい心境なアリスに対し。

「いや、ほんとに少しだから」

わらほども役に立たなさそうな。

リアンの返答に。

・・・アリスは何度目かわからない殺意を覚えるのであった。

「ま、アドバイザー程度に思ってくれたらいいから。俺のことは」  
そんなアリスの殺伐とした雰囲気を経く無視した、相変わらずの飄々とした態度に。

「じゃあ、アドバイザーさん、さっそく何かためになること、教えてくれねーか？」

今にもつっかかりそうな態度でアリスは聞いた。

「ためになるねー・・・。あ、基本的にパーティーは組めないから一人でがんばってね」

それに関しては、もうまったく期待しておりません。

「それと、親玉の居場所だけど」

たたたたたた

「？」

何かが通り過ぎる音がし、アリスがそちらを振り向くと、3歳くらいの黒い服を着た金髪の男の子が走っていた。瞳が大きく、とても愛らしい。

が、

その頭には、ぴよこんと、ウサギの耳がついていた。

・・・なぜ？

「な・・・？！」

アリスがそれに目を奪われていると。

「あ、いたいた。あいつ、バニーっていうんだけどね。バニーが親玉の居場所知ってるから。捕まえて案内してもらおうといいよ」

ぴよこぴよこと独特な動きをする、可愛らしいバニー君。

「あいつが・・・？」

その時、

アリスとバニーの目が合う。

次の瞬間。

「きゅきゅ〜」

バニーは全速力で駆け出した。

「な・・・！？ま、待て〜〜〜〜！！！」

それを慌ててアリスが追う。

「がんばって〜！アリス姫〜！」

それをヒラヒラとリアンが見送る。

アリスは全速力で階段を駆け下りるバニーを追いかけて、階下に消えていった。

「しっかし・・・」

一人残ったリアンは。

「いつまであの格好でいるんだろうねえ」  
どうでもいいことを気にしていた。

さてさて、何やら大変なことに巻き込まれてしまったアリス。女装したまま、まさに『不思議の国のアリス』のごとくウサギことバニーと追いかけて。さあ、無事にこの世界を解放することはできるのか。がんばれアリス！負けるな！アリス！！

そんなナレーションを入れている間に、アリスといえば・・・

「はあ、はあっ・・・！」

結構。

俺。

全速力で走ってんだけどな〜〜〜〜！！！！

バニーを追いかけて全力疾走中。

しかし、アリスとバニーの距離は縮まらない。どころか、下手をすると開いている。こんな格好をしていても、アリスは走らせれば

百米を11秒台で走る。

なのにつ……!!

なんだってあのウサギまがいに追いつけねーんだあ!!!

アリスは世の中の理不尽さをこんなところで痛感しながら、バニ―を追いかけるのであった。

「にしても、本当にむちゃくちゃな世界だな!!」

いつもの常識がまったく通用しない。その角を曲がれば1年教室……かと思えば、生物室。音楽室の扉を開けると、そこは図書室と、もう学校の中身がぐちゃぐちゃである。

リアンの言うことを8割方嘘だと決め付け、どつきりだと思っていたが、どうやらリアンの話は本当だったようだ。アリスの頭はその事実について深く思い悩むことをやめ（頭が思考を拒否しているともいう）、その校舎内を走り回る。

その中を、当のバニ―は軽快に走っていく。そして、廊下の一角をぴょーいと曲がる。

「にやる! 待て……!!」

アリスが追って曲がったそこは……

「な……体育館?」

なぜ、この学校の造りで、二階に体育館ができるのか……。アリスはその疑問に。

フタをした。

「とにかく……! 今はあのウサギまがいを……!」

そう勝手に納得し、アリスは体育館へ入る。

ダンダンダン

キュキュッ

「ヘイ！ブラック！パスや！！」  
「オツケ〜〜！いくで！ホワイト！！」

ザシュ

切れのいい音とともに、バスケットボールがゴールの網をくぐる。

「ヒュー！絶好調やん、ホワイト！」

「阿呆！わいはいつでも絶好調や！！」

そこにいたのは、同じ顔をしてエセくさい関西弁を話す二人組の青年だった。背は高くはないが、低くもなく、ほどよくかつこい部類に入るであろうその二人が、なぜか三枚目チックなのは・・・このアホっぽいノリのせいだろうか。

何はともあれ。

リアンについての人との遭遇に。

しばし、呆然とするアリス。

そんなアリスに気付き、二人は気付いて近づいてきた。

「ひえ〜。こらべっぴんさんやなあ。お姫さん」

「ホンマ、かわええな。名前何ていうん？」

そのブラックとホワイトなる二人は珍しいものを見るように上から下までアリスを眺めながら声をかける。

「さ・・・佐久間アリス・・・あんたたちは？」

ようやく少し回転してきた頭で。

ちよつと引きながら、アリスは答える。

「アリスやて。よう似合うてんなあ。わいはブラック」

と、黒のＴシャツの男。

「わいはホワイトや。双子やねん」

と、白いＴシャツの男。

何てわかりやすい・・・。

アリスは痛切にそう思った。世の中の一卵性双生児が皆こうだっ



たら・・・すぐ見分けもつくし、間違うこともないよな、と。全  
国の一卵性双生児の方々に何だかとても失礼なことを考えながら・  
・。考えの途中で。

アリスはようやく本題を思い出す。

「あー！バニーー！！バニーはどこ行つた！？」

アリスは・・・。

体育館と人にびっくりしてバニーを追いかけるのを忘れていたの  
でした。

「何や、バニー探してるん？」

ブラックの方が、アリスのその発言に反応した。どうやら、バニー  
のことを知っているらしい。

と、いうことは。リアンのいうあちら側の方ということになる。

「ああ。シンクロを・・・解いてもらおうと思つて・・・。えと、  
ブラックとホワイトも、あっちの世界の人・・・だよな？」

アリスはいまいち、ここで会う人間とどう接したらよいのかわか  
らず、控えめに質問を試してみた。

「せやせや。でも、向こうの世界もちよつと飽きたし。別にこのま  
までもええかなつて」

バスケもできるしな！と、ブラックは明るく笑う。

「いや、でも、俺は戻ってもらわないと困るし・・・」  
その能天気さに、いいわけないだろ。と内心思いつつ。

「寂しいなあ。せつかく世界を超えて会つたんやし、仲良うしよう  
で？な。アリス姫」

ホワイトは、そう言つとアリスにガバツと抱きつく。

ちよつと警戒心の落ちていたアリスは。

「ああ、ええ抱き心地！」

「ぎゃああー！！！」

抱きつかれてから叫ぶまでのしばらくの間、自分の状況が理解で

きていなかった。

正氣に戻り、叫び、腕の中で暴れるアリスをよそに、ホワイトはアリスにすりすりする。

「あゝ！！ずるいで！わいもアリスといちゃいちゃしたい！！！」

そう言つと、ブラックもその上から抱きついてくる。

「ぎゃー！！」

「ほんまやゝええ気持ちゝ！」

二人の男に抱きつかれ、しかもスリスリされたり、ベタベタ触られたり。

「ちよつ・・・！俺は男だつて！！離せゝゝ！！！」

ホワイトの左頬に右ストレート。

「ぐはっ！！」

「ああ！！ホワイト！？」

やつと解放されたアリスは肩で大きく息をする。そしてもう一度、二人に向かって

「俺は、男だ！！」

と言い放つ。

しかし

「それくらい見たらわかるわ！」

「それを含めてかわええゆーとんじゃ！」

あ、何かめまい・・・。

「しかし・・・右ストレートは効いたわ・・・。なかなかの腕やな」  
「慣れてますから」

おちゃらけ男はさらりと流し。  
しかし。

ボクシングなど、格闘系の習い事もしないのに慣れるってど  
よ。

「まあ、ええわ。それより、アリス、バニー探してんねやる？」

「あ、はあ」

いきなり変わった話の矛先に、アリスはついていけず生返事をする。

「どこにおるか、教えてもええで？」

さっきまで追いかけていたバーニー。それを、見失ってしまった。あのすばしっこさでは、やみくもに探しては次はいつ見つかるかわからない。

でも、元をただせば・・・

この二人のせいで見失ったと言っても過言ではないような気がする・・・。

「え！？どこ！？どこにいるんだ！？」

とにかく、今はこんな変なのに絡まれている場合ではない。居場所を聞き出してさっさとバーニーを捕まえよう。アリスの思考はそこへ行き着く。

「フフ・・・ただじゃあ教えられへんなあ」

ホワイトが、何か含んだような笑みを浮かべる。

「そうやなあ・・・チューしてくれたら、教えたってもええで？」  
にこにこと、ブラックが言う。

「な・・・！！！」

チュー

イコール キス

キス

イコール 接吻

アリスはその言葉を理解するまでにゆづに30秒かった。もちろん、キスの経験は・・・ない。悲しいかな。それが。

何をどう間違ったらファーストキスの相手が男になるのか。

しかも。

2人も。

「ああああ・・・あほか～～！！！！できるか！そんなこと！！！！」  
そのシーンと感触を想像し、鳥肌を立てながらアリスは絶叫する。  
しかし。悪魔の笑みを浮かべる双子はひかない。

「えっ？ええやん。チューくらい。減るもんやないしっ？」

「それにや、はよせんと困るのはアリスやろ？ほら～バーが捕まらんようなるで？はよ追っかけな」

じり。

じりと。

ホワイトとブラックはアリスとの間隔をつめてくる。

「ほら。どないするん？」

「もとの世界に戻したいんやろ？」

それは。

もとのの世界に早く帰りたい。もうこんな夢みたいの世界やホモな奴らはごめんだ。

でも。

だからって。

「やっぱ男とキスなんかできるか～～～！！」  
とりあえず。

顔の近くにあったブラックの顔面にお得意のパンチを繰り出す。

「ぎゃふ！！」

「ああ！！ブラック！？」

もろにパンチを受けたブラックだが、持ち前の（？）タフさでゾンビのように持ち直す。

「うう。ええパンチや・・・効いたわ・・・」

やはり双子。渾身のパンチを受け、同じようなことを言っている。  
「可愛ええ顔して2度もパンチ食らわせよって・・・！ま、そんな

気の強いところ好みやねんけど！で・も！条件は変えへんで！！チ  
ューせなバニーの居所は・・・」

「きゅう？」

「教えへんで・・・は？」

2人にせまれ、アリスの後ろは体育館の壁。その向かいにアリス  
を囲むようにブラックとホワイト。  
そして。

その2人の間に・・・。

『バニー！！！！？』

そしらぬ顔でたたずむは。

探し求めるバニー君であつた。

そして、3人からの視線をあびると・・・

「きゅきゅ」

ぴょんぴょこと体育館の扉に向かって走り出す。

「ま！待て！！バニー！！」

その後を、アリスはここぞとばかりに追いかける。

もちろん。

後に残つたのは・・・。

「そ・・・そりやないて・・・バニー・・・」

それぞれアリスに一発ずついただいた、  
ホワイトとブラックであつた。

さてはて。オチもついたところで。バニーとアリスと言えば。

「きゅ！きゅ！」

ぴょんぴょこぴょん

たたたたたた　ぴょん

独特のテンポと、それに見合わぬ速度で走るバニーと。

「待て～！」

相変わらずその美しい髪とスカートをなびかせながらそのバニー

を追いきるアリス。

そして。

相変わらず差は縮まらないのであった・・・。

くそ・・・！もういいかげんにしてくれよ！！

「は・・・はっ・・・！！」

アリスは縮まらない差に苛立ちを感じ始めていた。

いつになったらこの追いかけごっこは終わる？終わるのか？  
もし終わらなかったら？

ずっとこのまま？

一生？

頭をよぎる、最悪のシナリオ。

「一生追いかつけこななんて冗談じゃね〜！」

・・・苛立ちを感じながらも・・・アリスはたくましく走り続ける  
のでした。

そして・・・。

「あのウサギまがい〜捕まえたらその耳むしってやる〜」

何も悪くないであろう（？）バニーに怒りの矛先を向けるのであ  
った。

〜続く〜

## 第2話（後書き）

どうだったでしょうか。まだまだいろんなキャラが出てきてアリスに絡んでいきますのでお楽しみに！

### 第3話・庭とアリスとリアンとの再会！（前書き）

ボーイズラブですので、苦手な方はご遠慮ください。



### 第3話・庭とアリスとリアンとの再会！

体育館を出てからどれくらい走り続けたのか。

アリスは階段を昇ったり降りたり、廊下を駆け抜けたりとある意味どの運動部よりもキツイ運動を行っていた。しかも。全速力で、だが、いくら体力に自身がある者でもこれだけ走れば疲れが出てくる。

しかし。

「何であのウサギは・・・走るスピード変わらないんだ・・・よっ！」  
本日何度目かの不満を口にしながら、前方を駆けるバニーを追いかける。

そして。バニーは調理室の扉のすきまをするりと抜けていく。その後をバニーを追いかけてアリスも調理室へ入る。

そこは・・・。

調理室ではなく、いうならば・・・ジャングルであつた・・・。

大きく生い茂る草木。ツルをまく植物。見たこともない花も咲いている。真っ赤な大輪の花に群生する白や黄色の小さな花。木になつているのはこれまた見たことのない黄緑の実。

「ど・・・どこ・・・ここ・・・？」

もしかして、またどこかにシンクロした！？

しかも今度はジャングル！？しかも怪しげな植物がつ・・・！  
アリスは途方もなく広がるジャングルに、その場に立ち尽くす。  
むしように泣きたい気分になったのは・・・いたしかたないと言えよう・・・。

そんなアリスの横をバニーは、相変わらずの様子でたたと走り去る。

「あーバ、バニーー！！」

この際、3歳児だろうがなんだろうがどうでもいい。誰かがそばにいないと不安なのは仕方のないことであろう。たとえそれがちょっと・・・意思の疎通が不可能な相手でも・・・。アリスはそのジャングルの中を、バニーについて走り出した。

雑木林のように木々の生い茂るその中を必死に走って行くと、急に木々がなくなり、小さな丘に出た。その丘には一本の大きな木がたっている。アリスは息を整え、汗をぬぐいながらその丘のてっぺんにある木を見上げる。

「おっきな木だな・・・」

次に、バニーは見渡すと、バニーはその大きな木に向かって走っている。それを見て、アリスはバニーを追いかけるためその木を目指して走り出した。

その木は近くで見ると樹齢200年くらいたつてそうな大木で幹の太さは大人が5人くらいいないと囲めないくらいだった。バニーは何が楽しいのか、木の周りをぴよぴよこ回っている。

・・・何が楽しいんだ・・・。このえせウサギは・・・。  
何て。

ちよつとバニーへのイラつきを控えめにかもし出しながら。

「おい、バニー・・・」

そのバニーをとめようと、アリスがバニーに話しかけた時。

「何をしてる？」

低い、重低音がアリスの耳に響く。

びつくりしてアリスが振り返ると、いつの間にかそこには一人の男が立っていた。身長が高く、裕馬より大きい。190cmはゆうだけの筋肉がしなやかについている。黒髪に黒い目が深く影を落とし、それがその男の端整な容姿を引き立たせる。黒いズボンに深い青のシャツ。そのシャツの上には革のジャケットをはおっている。そこに、くわえタバコがきれいにハマっている。

その男はタバコの煙を一度はくと、もう一度アリスに言った。

「何をしているんだ？」

相変わらず耳に残る重低音に、体がビリビリする。

「あ……俺は……」

なぜか緊張して声が枯れる。

威圧感だ。

この男からはものすごい威圧感を感じる。まるで、すべてをねじふせるような……。

アリスは人形のようにその男から目が離せなくなってしまった。固まったように、動けない。

「……！ああ、悪い」

その男は急に何かに気付き、足で踏んでタバコの火を消した。すると、そのタバコを覆うように足元の草が伸び、タバコはその草によつて地面に吸収されてしまった。

「ここにある植物から作ったタバコだ。地に戻った」

まるでアリスに説明するかのようにその男は言った。

「もう大丈夫だろう」

そう言われると、アリスは今までの緊張が解かれたかのように体が動き出す。

「あ……え？大丈夫って……？」

声もすんなり出る。

「ここの植物にはそっちの世界にないものが多い。煙を吸って体が一時的に麻痺をしたんだろう。一種の中毒症状だ。元をたったから、もう心配ない」

「そっちの世界って……」

「なんとなくだ」

アリスが別の世界の住人だと、何となくわかったらしい。……何となくって……リアンよりひどいんじゃない？……とアリスが思ったかどうかはさておき。

「で？何をしているんだ？」

体の麻痺もとれたところで、その男は本題に入る。

「えっと・・・、シンク口を解いてもらうのに・・・バニーを捕ま  
えなきゃいけないんだけど・・・、バニーがここに逃げ込んだから、  
それを追って・・・」

少ししどろもどろになりながらアリスは答える。

その様子をじっと見ていたその男は。

いきなり、アリスの顎をつかむと、上を向かせる。

「・・・お前、名前は？」

アリスはそれを振り払い、その男を睨む。その男は睨まれている  
のに楽しそうに口をゆがめた。なんだか、嫌な感じを受けながら、  
アリスは名前を言う。

「佐久間・・・アリスだけど・・・あんたは？」

「ガーデンだ」

無表情に、答える。

「庭？」

「・・・ガーデンだ」

・・・このネーミングセンスってどうなってんだよ・・・。

アリスがそう思うのも、無理はないってことで。

「アリス」

アリスが一人でそんなことをブツブツ考えていると。

ガーデンなるその男は・・・。

まるで *share we dance?* かのよう。

ひらりとアリスの腰を抱くと、その端正な顔をアリスの顔にぎり  
ぎりまで近づけ、これが女ならいちこころでクラッといっちゃいそう  
な表情に。あの、腰にくる重低音で。

「俺の愛人にならないか？」

言ったセリフがそれかよ！と、つつこみたくなるような言葉を吐  
いてくれた。

「誰が愛人だ！てか、離せっ・・・！！俺は男だっつのー！！」

渾身の力でガーデンを遠ざけようとしながら。アリスは本日何度

目かの自分の性別を公開した。  
ていうか！何でどいつもこいつも！俺を女だと思っただよ！失礼  
だっつの！！

内心ご立腹気味なアリスだが・・・悪いのはあきらかにお前だろう  
と。アリスの心の叫びを聞いた人がいたならば、そう言ったであろ  
う。

「だから？愛人になるには何も問題はないだろう？溺れさせてやる  
ぜ？」

またそんな。女の子が卒倒しそうな笑顔で。

女の子が一発で落ちそうなセリフ言っで。

アリスもほら。男なのに、その色気にふいうちをくらって赤面。

「・・・！！！！だっ・・・！！！！ていうか！あ、愛人ってことは妻がい  
るんだろ！？妻が！！？」

慌てて理性の壁を持つてくる。

「俺の妻は寛容だからな。愛人を何人作ったところで支障はない」  
さらりと言うその男に。

そんなは何人もいるんかい！と。フラれ続けているアリス君は。  
ちよこつと殺意を抱いたりしてみたり。

「妻はよくても俺が嫌なんだよ！！俺はバニーを捕まえて！シンク  
口を戻して！元の世界に戻って普通に女の子と恋愛するんだっつー  
の！！」

とりあえず。怒りにまかせてきつぱり愛人の座は辞退する。

「残念だ」

それだけ言っで、すつとガーデンはアリスから離れた。アリスがそ  
れにほつとし、胸をなでおろした瞬間。

唇に、柔らかな感触。

「・・・！！？」

その次を感じたのは、舌で唇を舐められる感触。微妙なタッチで  
唇を舐められただけで。

アリスの背中をぞくぞくしたものがかけあがる。

唇を丹念に舐めあげたら。盛大にチュツと音をさせて。ガーデンはアリスから唇を離れた。

「通行料だ。バニーはあその扉から出て行ったぞ」

入り口とは反対方向にある、ジャングルにふさわしくない、むしろ、何でこんなものがここに？ 的な扉を指差す。それだけ言うと、あまりのことと、ぞくぞくしたのでその場に座り込むアリスを置いてガーデンはそのジャングルの中へ消えて行ったのであった。

アリスのファーストキスは・・・結局男に奪われる運命にあったのだった。

「・・・・・・・・」

1年生教室の窓際。最後尾。

アリスはそこに座り、誰もいない外を眺め・・・たそがれていた・・・。

否。

グレていた。

「何でっ・・・男とキスなんか・・・!!」

ふつつつと湧き上がる怒り。もう、どこにあたったらいいのかわかりません。

ちなみに。

たそがれる彼のまわりには。彼の怒りの矛先となった無残な机や椅子たちが散乱しているのですた・・・。

「くそ・・・マジで何なんだよ!!ここは!ホモばっかだよ・・・

・!!」

「あゝ、そうかもねえ」

「男だつて!言ったのにっ!!」

「言ったのに?」

「キスしてくるし・・・!?!」

「はろっ」

「うつつわああ!!!!」

一人でいたはずのその教室で。いつの間にかアリスの独り言に付き合っていたのは・・・何かもう。すべての元凶な気をするリアンであった。びっくりしたアリスは、椅子から飛び上がって叫んだ。

絶対。寿命が縮んだと思われる・・・。

「なにになに? そんな飛び上がるほど喜んじゃってさ!」

相変わらずの。そのテンション。

「リ・リアン・・・!!? い・・・いつから・・・!!」

心臓のドクドクという音が収まらないまま、アリスはリアンに問いかける。

「ん? ずっと」

ずっととはどこからなのか・・・。聞くのが非常に怖いアリスだったが。それよりも。

「ていうか!! 何なんだよ!! ここ! もう嫌だっ!!! 変な人間ばかりじゃん!!」

まずはこれでしょう。

「まあまあ。そこはどうしようもないとこだからさ!」

だってそんなの俺じゃどうにもできないもん。あはははははと、リアンはアリスの訴えをザッパリ流す。そして。

「ところでさあ、アリス!」

にこやかに。

「お茶しない?」

リアンというその人は・・・斜め45度の角度から、くるのであった・・・。

～続く～

### 第3話・庭とアリスとリアンとの再会！（後書き）

ガーデン登場。リアン再登場。お茶って……。唇をついに奪われたアリス。次はどうなる！？お楽しみに



## 第4話く心のオアシスとの出会いく（前書き）

ボーイズラブとなっております。苦手な方はご遠慮ください。

#### 第4話　心のオアシスとの出会い

お茶しない？

ある時期に、若者がナンパの手としてよく用いた台詞。・・・今、こんな陳腐な台詞で女の子をナンパする男はいるのだろうか。

「まま、すぐそこだからさー！うまいよー！アイツの淹れる紅茶！」  
しかも。

うんとも言っていない相手をかなり強引に引きずっていくこの男・  
。。（しかも本人はとても楽しそう）  
首根っこをつかまれ、引きずられながら、アリスは深いため息をついたのであった。

引きずられていった先は保健室だった。

「何で保健室・・・」

「細かいことは気にしない」

リアンは相変わらず元気に扉を開けた。

「マスター！お茶いれて」

そこにいたのは。

「ああ、リアンさんですか。いらっしやい」

爽やかな風がその人のまわりにだけ吹いているような。そんな柔らかな涼しげな青年であった。センターわけしたさらさらな栗色の髪と涼しげな目元。優しい笑顔。ノンフレームの眼鏡もよく似合っている。

「さ・・・爽やか青年だ・・・！」

思わずつぶやくアリスであった。

そんなある意味、失礼極まりないアリスに対し、マスターなる青年は嫌な顔ひとつせずにアリスを迎える。

「おや、お客さんですか。こんにちは。僕はマスターと言います。」

今、お茶をいれますね」

ふんわりと向けられる笑顔と言葉に。

「初めてまともな人と会ったよ〜！」

思わず感涙。

「お〜い！」

おがむようにマスターを見つめるアリスに。横からリアンがつっこむのであった。

ゆったりと流れる時間。お湯の沸く音と、部屋中に香る紅茶の茶葉の香り。揃いのティーセットは女の子が見たら飛んで喜びそうな物だった。たとえ場所が、その雰囲気になくわな保健室であったとしても。ティーセットの並ぶそのテーブルや椅子が、学校の備品であったとしても。まるでそこだけ、英国の風がふいているようだった。

「はい、どうぞ。熱いですから気をつけてくださいね」

おいしそうな紅茶がアリスの前に置かれる。

「はい、リアンさん」

その次に、リアンの前に置かれる。

「サンキュー！」

そしてどこまでも、なこの男。

気を取り直し、アリスはいれられた紅茶を飲む。

「・・・！おいしい！」

今までインスタントの紅茶しか飲んだことのなかったアリスは、マスターの茶葉からいれた紅茶のおいしさに、思わずそうつぶやいた。

「そうですか？ありがとうございます」

そのつぶやきに、にっこりとマスターが笑顔を返す。

アリスは一時の間、この現実を忘れマスターが作り出す温かい雰囲気身をゆだねるのだった・・・（現実逃避ともいう）。

現実逃避から20分後。

「そういえば、アリスさんは向こうの世界の方ですか？」

談笑をしながらお茶を飲んでいると、ふと、マスターがそう言った。

そこで。

ようやく。

アリスはお茶を飲んでいる場合ではないことに気付くのであった。  
。。。

「あー！そう！そうなんです！俺、シンクロとかないといけなくて。  
。。！」

何杯目かのおかわりした紅茶を飲み干して。アリスはマスターに自分の立場を説明しようとした。

シンクロした世界を元に戻して。

普通の世界に帰りたいんです。

そのためには親玉に会わなくちゃいけなくて。

それにはまず、バニーを捕まえなくちゃいけなくて。

切々と、説明。それをマスターは静かに聞いていた。そして、すべてを説明し終わった時。。。

「バニーさんなら、職員室じゃないですか？というか・・・親玉っていうのはクイーンさんのことですよ？クイーンさんも職員室にいると思いますよ？」

今までの・・・俺の苦勞っていったい。。。

アリスの脳裏は一瞬真っ白になった。

だって・・・職員室って。確か。アリスとバニーの追いかけてこが始まった場所だったのでは。。。

「ねえ、リアンさん？」

マスターが同意を求めたその先の相手に。

アリスは我に返った。

「は！？何！？リアン知ってたの！？」

がたんと椅子から立ち上がってアリスはリアンに詰め寄る。リア

ンは飲みかけの紅茶のカップを持って椅子ごと一步下がる。

「ん？いやさ」

ぽりぽりと頭をかきながら。

「さっき思い出したんだよねー！！」

あははははと、高らかに笑うその男は。きっと最強なのだろうと。アリスはへこみながら思うのであった。

「ま！そんな落ち込むなって！居場所わかってよかったじゃん！なあ、マスター！」

まったく悪びれないリアンに。

「よくない！！おかげで俺がどんな目に合ったと思ってたんだよ！！」半泣き状態で訴えるアリスに。

「人生、そんなこともあるって！」

全開の笑顔で、まったく。何の根拠もないことを、言つてのけるのであった。ていうか、親玉の名前、教えてなかったつけと、あつけらかと言いながら。

我関せずと、保健室を漁ってお菓子を探し出すリアンをよそに。

その唯一の良心がアリスをなだめる。

「すいません。何だか、僕たちの世界の住人が迷惑をおかけしたみたいで・・・」

なぜいつも。あやまるのはまったく。何にも悪くない人間なのだろうかと。世間の矛盾をこんなところで感じながら。

「職員室は保健室を出て、右に曲がって階段を昇ったらすぐです」

優しく教えてくれるマスターを半ば本気で拝みそうになりながら。「ありがとうございます！マスターのおかげで・・・俺、がんばれそうです・・・！」

何ていい人なんだろうか。リアンと違って。

そんなことを思うのは・・・失礼だろうか。

「いいえ。がんばってくださいね。可愛いアリスさん」

マスターはそう言うと、アリスの頬にちゅっとキスをした。

「・・・！！」

アリスはそのマスターの行為に真っ赤になる。

「・・・あ・・・ありがとうございます・・・！」

しどろもどろになりながら。

でも、男にキスをされて嫌な気がまったくしなかったのは。

マスターの人徳と言えよう。

アリスは応援してくれているマスターに感謝しながら、保健室を出て職員室を目指した（もちろんリアンは放っておいて）。

「・・・職員室・・・！」

マスターの言われた通りに来てみると。本当に、今までの苦労はなんだったのかと思いたくなるくらい簡単に目的地へ着くことができた。

アリスは親玉もとい、クイーンと会うことに緊張しながらも、職員室のドアを開けるのであった。

「しつれいします！」

2回ノックに大きな声でご挨拶。

・・・しみついている。

がらりとドアを開いたアリス。

そして、職員室へと、踏み込むのであった。

く

く 続

#### 第4話く心のオアシスとの出会いく（後書き）

次がたぶんラストです！とりあえず、私の中で序章が終わる感じ  
です。お楽しみに

## 第5話・最後の追いかっこ（前書き）

ボーイズラブとなっております。苦手な方はご遠慮ください。



## 第5話・最後の追いかっこ

職員室の中は・・・もはや職員室ではなかった・・・。

この表現は、とても正しいと思う。外見は職員室だが、中身は違うのだ。どう違うかっていうとそれは・・・。

「ここは・・・どこぞの王宮か・・・？」

そう、アリスが思わず呆然としてしまうような造りなのだ。

何？この赤い絨毯？

何？この落ちてきそうなほど大きいシャンデリア？

何？この・・・

「・・・」

「・・・」

きよろきよろと室内を見回していたアリスは、壁際にいた人？と目が合う。なぜ？マークかという・・・。

「・・・う、薄い？」

薄いのだ。と、いうか、これは・・・

世に言う、トランプ兵つてやつじゃ・・・！！

実物を見ると可愛くない。と、いうか。気持ち悪い。頭身は4頭身くらいか。

などと、しげしげと考えていると・・・

「貴様！侵入者だな！ひつとらえてクイーン様に突き出してやる！」

アリスを見つけてからゆうに15秒。同じように止まっていたトランプ兵はアリスに向かってさういうと、いきなり5枚（人??）に分身し、アリスを囲む。

「や！ちよつと、待ってくれ！！俺は・・・！」

何だか怪しい雲行きに、話し合いの場を設けようとするアリスだったが・・・。

「とらえろ～～～!!」

あえなく、その不思議な生き物によって両手を縛られ、生け捕りにされてしまったのだった。

「よく見るとなかなか美人だな」

「クイーン様も喜ばれるやもしれん」

「クイーン様は美人がお好きだからな」

「俺、男なんだけど」

美人って何だよ。

「クイーン様はどこにおられるか？」

「奥のお部屋ではないか？」

「では、この者を献上しに行くとするか」

「っていうか、クイーンって・・・」

美人がお好きって・・・

レスビアン??

ずるずるとランプ兵に引かれながら。アリスはまだ見ぬ親玉、クイーンについて想像を膨らませるのであった。

どうやら、本当に親玉はクイーンと言って、ここにいらっしゃるらしい。

何かよくわからない生命体にラチられてしまっではいるけれど。クイーンの所まで運んでくれるなら手間が省けるかな。とか思ってしまったのは。平和ボケした日本で生まれ育っているからであろうか。とりあえず。

シンクロを解いて、さっさと平穏な日々に戻りたい!!!!!!

アリスの願いは、ただもうそれにつきるのであった。

・・・あゝ、なんとなく予感してたけどさあ・・・。

王広間の一段高くなったその場所の。豪華な椅子にふんぞり返っ

ていたのは・・・。

クイーンという名の。

男であった。

クイーンというよりはキングのほうがあっているのでは？と言いたくなるようなその青年。その端整な顔は、どこか冷たいがとても印象的で一度見たら忘れることなどできないほどの美しい顔立ちだった。いい男！まさにこの一言につきるような。人を支配することが生まれた時から決まっていたような、そんな雰囲気と風貌である。後ろは肩につくくらいまで伸びているそのブロンズがその端整な顔を引き立てている。

そして。そのまわりには・・・。

美男子が囲んでいる・・・。

何か？あれか？この世界はホモばかりか？

ちょこつと投げやりになりながら、アリスがそんなことを考えていると。尊大なクイーン様がアリスに話しかける。

「お前、名前は？」

「佐久間アリスです・・・」

なんかもう。この後の展開もだいたい予想できちゃうしね。

「俺の側室にならないか？」

はいはいきましたよ。つか。俺はそんなこと微塵も！望んでねえつーーの！！！！

「辞退します」

さらりと受け流すアリス。

「くく。まあいい。で？何か言いたいことはないのか？何もなければ外へ放り出すが」

この男もさらりと恐ろしいことを言ってくれる。

「シンク口を、解いてほしいんですけど・・・」

アリスは、クイーンに。ついに。長い長い道の手を経て。この言

葉が言えた。

「・・・嫌だ」

半分どうでもよさそうに、クイーンはアリスに言った。

「何でだよ！シンクロ解いてももらわないと困るんだよ・・・！」

アリスは食い下がった。

何よりも！ここにいたら精神状態がおかしくなる！！

俺は男で！！女の子が好きなんだよ！！！！

なんだかちよっと、そこかよ！とつつこみたくなるような理由を  
思っアリスであつたが・・・。

「俺はここが気に入ったんだよ。だから。今のところシンクロを解  
く気はない」

しれっと話すクイーン。

「あんたの気に入った気に入らないでいつまでもこの状態を作つて  
もらつても困るんですけど・・・俺の友達やクラスメートが、空  
間をさまよつてるんです・・・！助けてやつてもれえませんか」  
これも本当。

何とか考えを変えて欲しい。

元の世界に戻りたい。

そんな、アリスの思いが伝わったのか・・・。

「・・・わかった。シンクロを解こう」

頭を下げ頼むアリスに、クイーンが言った。

「え・・・！本当ですか！？」

アリスはそのクイーンの言葉に顔をほころばせる。

「ただし。条件がある」

やっこの思いでクイーンのところまで辿り着いたアリス。シンク  
ロを解いてもらおうとしたが、クイーンは簡単にはシンクロを解い  
てくれなかった。

「条件とは・・・」

「時間内に、このバニーを捕まえることだ」

制限時間30分。その時間内に、（いつの間にか現れた）バニーを捕まえること。それができれば、シンクロは解く。

ただし。

それができなければ・・・

「お前には、俺の側室にでもなってもらうかな」

死んでも・・・捕まえなければ・・・。

アリスは切にそう感じた。・・・身に詰まるとはまさにこのことだね

スタートラインは職員室前の廊下。またまた不思議なこの空間では、いつの間にそうなったのか。先が見えないほど長く廊下が続いていた。本当の、追いかけてこである。そして横を見ると・・・どこまでも余裕なバニーがびよこびよこしている。

・・・人がピンチを感じまくりな時にこのウサギもどきめ・・・首ひねってやるうか・・・。

何て怖いこと考えてみたりみなかったりしながら。トランプ兵によって両手の拘束が解かれる。

「せいぜい頑張って追いかけるよ」

ムカつくほど憎たらしい笑みを浮かべながら、クイーンはアリスにそう言った。

「俺のベッドで死ぬほどよがらせてやるから」

さらりと放送コードにひっかかりそうな台詞を吐くこの尊大な男に。これが女ならメロメロの腰くだけなんだろうな、と思いながら。「・・・俺は男だっつの」

いったい日に何度この台詞を口にすればよいのか。ていうか、まあ、この格好のせいだよな！うん！と、一人で無理やり納得しな

がら。

男だと言っているのに相変わらず。

「だから何だ」

まったく気にしないここの連中め……。

腕組をして、ニヤニヤしながらクイーンはアリスとバニーを眺めている。

その中で。

「では、いきますぞ！」

トランプ兵の高らかなトランプペットの音が廊下に響き渡り（大げさなんだよ！）。

「よ～～～い！」

ドオン！！

ピストルの小気味よい音が響いた。

そして。最後の追いかけてこつこが始まった……。

まっすぐに伸びた廊下はどこまでも続き、アリスはその長い髪とスカートをためかせながら前方を走るバニーを追いかける。

というか。何で一緒にスタートしたのに、こんなに差がでるかな……。

必死に走って追いかけるアリスをよそに。あきらかに。前方のウサギは余裕である。後ろを振り向きながら、時には後ろ向きに走りながら……、アリスの怒りのバロメーターをあげてくれる。

「この……くそウサギ～～」

それなのに、一向に縮まらない距離……。どんな走りっぷりだ。このウサギは（注：ウサギではありません）。

そんな殺伐とした中を走りに走り続け。

「残り5分です！」

どこから現れたトランプ兵がそう告げる。

残り。5分。

ヤバイ。

非常にヤバイ。

もう20分以上も走り続け、しかも、その前にも走り通しのアリスのスピードはあきらかに落ちまくっている。決定的に距離があかないのは、バニーがそんな様子を楽しみながら微妙な間隔を取って走っているからであろう。そんな状態で、残り5分でバニーが捕まえられるはずもない。

てことは何か・・・？

シンクロはずっととかわれないまま・・・

あまつさえ、俺は・・・

クイーンという名の・・・男の側室・・・。

「嫌だッ・・・！！嫌すぎるッ・・・！！！！」

背中を流れる嫌な汗を感じながら、前方のバニーを見据えると・・・。

「きゅ！？」

・・・こけた。

いくなれば。あゝ、ほら！後ろ向きで走ってるからでしょ！しょうがない子ね。とい

うやつである。

びたんと硬い廊下にこけ、小さなバニーはきゅーきゅー泣き出した。

「お、おい！大丈夫か！？」

さすがに、泣いている子どもには弱い。アリスは、泣いているバニーに近づく。

これは、しかし。思わぬ形でアリスに幸運の女神が微笑んだようだ。

「どっか、けがしたのか？おい、バニー？」  
やっと追いついて、バニーを心配し、肩に手をかけようとした瞬間。

ごちん！

盛大な。音がした。

「きゅっきゅー！」

先ほどまでうずくまって泣いていたバニーは一転。がぜん元気。逆に、アリスはというと・・・。

「いつてエー・・・！」

バニーに思いつきり。すねを蹴られた。

そう、バニーはこけるふりをし、嘔泣きをし。あまつさえ、アリスのすねを思いつきり蹴ってくれたのだった・・・。

そして、まったく悪びれるはずもないバニーは。アリスから安全距離を保ち、離れると。

アリスに背を向けて。

「何・・・？」

痛みの中で、半泣きになりながらアリスの見たものは・・・。

おしりペンペン。

あっかんべー。

だった・・・。

「ははははは！してやられたなあ！」

その模様を。クイーンは先ほどの大広間にてモニター観戦中。クイーンにとっても意外なバニーの行動に、果ては腹を抱えて笑いはじめた。



「くくく・・・、側室は近いなあ。アリス・・・」

モニターの前でほくそ笑みながら。

もう誰が見ても。この追いかけてこの結果はあきらかで。

あとは、タイムリミットを待つだけ。

というか、その時間すら無駄？

と思ってしまうような、この状況で。

「この・・・くそウサギ・・・」

マグマのような・・・

「テメー・・・いいかげん・・・」

ふつふつと恐ろしい、アリスの怒りが。

「ブチ切れたぜ・・・」

こんな3歳児に、キレることはないさ。

つか、んなことできつかよ。

そう思ってきたアリスだったが。

「いいかげん・・・おいたが過ぎんじゃねえの・・・？」

悪いことをしたらおしおきだよな。

一人でぶつぶつ言いながら、アリスはすくつと立ち上がる。

その瞳には・・・怒気が・・・。

前方でアリスをからかっていたバニーにも、その怒気が伝わったらしい。バニーはピクリともせず、アリスを見てたたずんでいる。

アリスは、そのバニーに対して。

大きく深呼吸をしたあと・・・。

「てめー！！このくそウサギ！！誰に喧嘩うつてやがんだ！！いいかげんにしやがれ！！その耳引っこ抜いて誰に喧嘩うったか体でわからせてやるからな！！ガキだからって誰が容赦するか！！」

一歩、一歩と言いながらゆっくりアリスはバニーに近づく。

それに、一歩ずつ後ずさりを始めたバーニーに対し……。

「ウサギ！！人の許可なく、勝手に動くんじゃない？！！！！そこで止まって待ってる！！」

びしっと、バーに指をさして。

「これ以上！俺に逆らうんじゃねえ！！！！！！」

どっかんと、大爆発……。

はー、はーと、肩で息をするアリスに……。その場で固まって  
いるバニー。

そこまで言つてようやく少し落ち着いたアリスは。ちよつと言ひすぎたかな？なんて、後の祭りなことを考えながら。いやはや、相変わらず、キレると手のつけられないこの男。

「あ……おい？」

固まるバニーに、声をかけようとした、その次の瞬間。

「おぢさん、おぢさん、おぢさん……！」

何と。

バーは。

アリスに向かって全速力で走ってきた。

「な・な・な・な・！？」

そして。

アリスへ向かって盛大にジャンプ！

「うわあ!？」

バーは、アリスにくっつき、すりすりと頬をすりよせている。

それはもう、あなたにメロメロよん。という感じで……。

「ど……どうなってんの……?」

いきなりの展開に、アリスはどうしていいかわからず呆然とする。

「よかったじゃん、アリス！」

すると、後ろから突然声をかけられる。

「・・・リアン!?」

振り向くと、そこにはいつでもどこでも神出鬼没、なりアンがいた。

「バニー捕まえたんだね〜すごいすごい!」

本当にそう思ってたのか?と思うような言い方なりアンだが。それよりも。

「ど・・・どゆこと?これ・・・?」

アリスは、自分の胸の中にいるバニーを指差してリアンに問うた。

「あゝ、それね」

ぷぷつと、リアンは笑いながら。

「バニーはねえ、マゾなんだよ」

マゾ。

「この歳でマゾとかおつかしいよねえ!」

あはははは!と笑いながら言うリアンに。と、いうことは何か?

「俺は女王様かよ!!!」

冷静につっこむアリスだが。

「よくわかってんじゃん。さっきのアレ!女王様以外の何者でもないでしょ〜!」

ちよと、自分の性格について見直す、というか、今後考えていきたいと思います・・・。

そう、思わずにはいられないのであった・・・。

「さあ、バニー、アリスから離れな」

ひとしきり笑ったあと、リアンはバニーにそう言った。バニーは、それに対し、嫌々と首を振る。

「しばらくこのままかなあ」

原因のいったんであるアリスは、苦笑いを浮かべながらバニーを見つめる。

しかし。

「だめだよ」

リアンは、いつになくまじめにそう答えた。

「え？」

「だって、アリスはバニーを捕まえただろ？」

バニーを捕まえるということは……。

「！あ……！」

「クイーンも、モニターで見てたはずだから。ほら」

あたりを見渡すと、空間がガラスのようにかけらになって少しずつ崩れていつている。

「もう、元の世界に帰らないとね」

リアンはそういうと、バニーをアリスから引き離す。

「きゅきゅ……！」

バニーは半分泣きながら、アリスに手を伸ばしている。

「リアン……バニー……」

何だか、夢のような時間だった。

。いろいろながあつて、頭の中は今でもぐちゃぐちゃだけど……。

何だか、元に戻るとなったら、少し寂しい気がする。

「ほら、バニー、アリスにお別れしな」

バニーは嫌々をし、聞かない。

そんなバニーの頭をなで、そして、アリスは。

ちゅっと、バニーの額にキスをした。

「かなりムカついたけど……追いかけて、楽しかったぜ。バニ

ー

につこりと、バニーに微笑む。それに、バニーは大人しくなる。

「リアンも、世話になってないけど、ありがとな！」

「そうくるかい」

どちらからともなく、静かな笑いがこぼれる。

「マスターたちにもよろしく。思えば、貴重な体験だったからさ！」

「何ならまたするかい？」

「はは……考えとくよ」

まさしく。解決したから言える台詞であろつ。

そして、空間が歪みだす。

「じゃあね、アリス」

「じゃあな。リアン、バニー」

すると、バニーはリアンの腕の中から逃れ、アリスの元へ駆け寄る。

「バニー！」

止めようとするリアンの声を背に、バニーは、ポケットから小さな石を取り出した。

きらきらと光の当たる角度によって変化するその石の色。見たことのない石だった。

「くれるのか？」

アリスが聞くと、バニーはこくりとうなづいた。

そして、その石をアリスに渡すと、リアンの元へ帰った。

2人が、手を振っている。

その2人を、大きな光が包み込んだ……。

「……い……」

遠くで誰かの声がする。

「お……い」

光が、入ってくる。

「佐久間！おいてば！」

アリスは、目を覚ました。

「ここ……は？」

目の前には、見慣れたクラスメートの姿。

「おーい！寝ぼけてんじゃねーか？家庭科室だろ？てか、衣装合わせの最中に寝るなよ！」

ははははと、他のクラスメートたちも笑う。

いつもの、風景。

「やっぱり似合うね」

いつもの、声。

「別にメイク、いらなくね？」

「今までののは・・・夢だったのか・・・？」

「ほら、いつまでもソコにいないで、出て来いよ！細かいところ直すから」

「あ、ああ」

アリスが立ち上がった時、ポケットから、何かが落ちた。

「これは・・・」

その石は、まぎれもなく、アリスがバニーからもらったものだった。

こうして、アリスは無事元の世界に戻ったのであった・・・。  
一つの、大きな思い出とともに・・・。

～END～

## 第5話・最後の追いかっこ（後書き）

完結しました！アリスな世界！今まで読んでくださった方々、ありがとうございました！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1090a/>

---

アリスな世界！

2010年10月8日15時05分発行